



ほととぎす 3円無目打誤作

「このあいの神戸大会は、非常な盛会だったそりですな」

「ええ、とつてもにぎやかで、本当に愉快でした。田原さんと林さんを除いて、ちとの方々は全くの初対面でしたが、文通だけで十年の知見のように思っていた集友にお目にかかれて、文字どおりあいのさつめきで趣味談にふけられるんですから、郵趣の友つてありがたいもんですねエ」

「22日と申しますと、全国的に暑い日だったようですが、神戸の方はいかがでしたか」

「その身志に出足をそがれたせいか、出席を予定しておられた地元の方が、二三欠席されましたが、林さんの御高配による会場が、とてもすばらしい所で、寛や懐水のある広々した庭園の松のこすえ越しに淡路島や瀬戸内海を歩きかろ絵を目の下に見おろせるゴウセイなお宅で、本当に気分がよかつたですよ」

「珍品コンクールで、先生の出品されたものが、オ1位になつたとか聞きましたが、きよりはそれを拝見に来たんです。なんだか、現行通常切手のエラーとかだそりですな。ひとつそれを見せてくださいませんか」

「どうぞ、どうぞ。人に見せたくつて見せたくつて、ウズウズしてるところですので、イヤだとかつしやつてもお見せするつもりですよ。さあ、これがそれなんですがね」

「へへえ、ほととぎすの3円切手のシートですね。別に変わったところもないようですがねエ。ありやりの、目打がありませんね、こりや」

「目打なし誤作というわけでしょうか」

「なんだかすこし広々して、間がぬけたような感じがしたんですが、1シート全部がこうも完全に目打がないと、どうもないのであつりま見みたいで、ちよつと気がつきませんですね」

「戦争末期や終戦後の無目打切手のシートを見なれていますと、ついそんな気になつてしまいますね」

「先生、これは、いつ、どこで手に入れられたものなんですか」

「私が神戸に出発したのが7月20日でしたから、その3日前の17日に、長岡局の窓口で見つけたものなのです。さつそく、神戸大会に持参して行つて、皆さんにとらんに入れたというわけなんです」

「局で始めてこれを見たとき、どんな気がしましたか」

「17日の10時頃だつたでしょうが、長岡局の郵便課の駒形さんから学校に電話があつたんですよ。「先生、いま3円の通常切手目打のないのが見つかつたんですがね。これはちよつと珍しいものだと思いますが」と言葉ではちよつとなどとかつしやつてはいましたが、自信滿滿たる様子でした。いや、これには私もびつくりしました。とにかく現物を見なくてはと、自家用の自転車で局まですつとんで行きましたよ」

「そりやそりてしよりなア」

「現品を見て、思わすうりましたね。いままでにも、誤作による目打なしを田型やペアでお目にかかつてはいましたが、それがシートであるんですから、りならざるを得ません

よ」

「見つかったのはその日だったんですか」

「いや、それがまたおもしろいんですよ。発見者である、窓口の係員の佐藤さんからお話をうかがったのですが、見つかったのは数日前だったそうで、目打がないので変だというわけで、一応別荘に残しておいたそうなんです。ところが、その日、3円切手を買いに来た人があつたので、すんでのことに切つて売るところだったのを、佐藤さんが、どう考へても珍品らしいので、駒形さんに話をし、私に連絡があつたというわけなんです」

「そりや、あふなくも目の目を見ないようになるところだったんですね。まさに、佐藤さんは殊勲賞そのものですね」

「オリンピックの種目カバーの切手貼りをしたとき、瀬戸口さんが、たまに目打なしの切手でも出てこないかなア、などと言つていたんですが、それに聞くすとは思ひもよりませんでしたよ」

「それにしても、神戸大会の直前に発見されるとは、実にタイムリーでしたね」

「珍品コンクールに出品すべき、カツコのいものかなくて、佐生していたときだったんですから、まつたくタイムリーでした」

「いや、ウソばかり。先生なんぞ、珍品をザクザクとお持ちなんでのに」

「いやいや、とんでもない話ですよ。珍品どころか、まともなコレクションすら持つていないんですから、珍品コンクールには、いやはやどうしたものかなアと頭をいためていた最中でしたので、それこそ、奇貨おくべしですか、それとも、おくべからずですか、ともかく、天祐神助われにありとばかり、神戸大会に持つて行つたんです」

「どうも先生は言うことがオーバーだなア」

「いやいや、本当の話なんですよ」

「無論、この切手の目打なし誤作は、始めて発見されたものなんでしゅうね」

「ええ、ほかに聞いておられませんので、新発見のものと思います。郵趣界に確認してもらうためにも、長岡郵趣会の神戸大会は、總好の板会と思つて皆さんにひろうしたんです」

「にはる、なるほど」

「単に、長岡郵趣の誌上で発表したんでは、いつぞやの、切手と女房と電気冷蔵庫のデンで、皆さんから本当にしてもらえないおそれが多分にありますからね」

「いやあ、あの電気冷蔵庫にはだまされましたね。まことしやかに本当とウソをこねまぜて、トントンと話を進めていつて、最後に推理小説よろしくドンデン返しをされてしまつたんですからね。とにかく先生の文章は、マニツバをつけて読まない、シテヤラレそうですから、現物を見ないうちは、どここのところまで信用してよいのか、どこからフィクションになるのか、ケジメがつきませんからね」

「あの原稿以来、たしかにその心配がかりますからねエ」

「それで、珍品コンクールはどんな方法で選定したんですか。やはり、出席者の投票で決めたんですか」

「そうなんです。出席者のほとんど全員が、自分のコレクション中の珍品番号の中から、これぞと思つたものを挙げてきたんです。全部で10点の出品があつたのですが、ところが、なにぶんにも、名にし負ひ長岡郵趣会の精鋭の出品物のこととて、見たことも聞いたこともないような珍品ばかりがズラリ」

「なるほど。そりやそうでしょうね」

「だもんで、出品者に珍品なるニオンを解説してもらふことになりました。こうなればこつちはしめたもんで、選挙演説よろしく、一席ブチましたよ」

「おほには、先生得意の音論歌で点数をかせいだというわけですね。どんなことを言つたんですか。ぜひ聞かせてください」

「もう忘れてしまいましたかね。でも、オ1位はこれに決定したようなもんだから、オ2位以下を投票してくださいだとか、私の出品物に投票くださつた方々には、このシートをバラしたとき、ペアを額面の6円で分譲することを公約しますなどと言つたようです」

「ええッ。本当ですか。額面で分譲するんですか」

「ですから、公約と言つたでしゅう。そもそも公約と称するものは履行不遂ということをも前提とするのが常軌でしゅうから」

「ひどいなア、先生は。それで、どんなふう

に投票したんですか」
「各人がオ1位からオ3位まで選んで、無記名で投票し、1位を3点、2位を2点、3位を1点として集計しました。私の買取策謀が効を奏したんでしゅう、圧倒的大差でオ1位の栄冠を得たわけなんです」

「そして、電文4種現寸カシエの初Eカバーをせしめたというわけですね。それにしてもどうしてこんなエラーができたんでしょうかね」

「要するに、目打板にかけるのを忘れたという事なんですよ。無論、切手の製造の際には、こんな目打を忘れたものは、ある程度発生するであろうことは、当然予想されるのです。しかし、その後の厳重な検査のときに発見されて、然るべく処理されるのが常なんです。その検査の目をのがれて、窓口に出て来たというわけでしよう」

「すると、日本切手で、このほかにもあるべき目打のないものもあるわけですか」

「そうです。ごらんに入れましょうか」

「ええッ。先生はほかにもこの種のエラーをお持ちなんですか。ぜひぜひ見せてくださいませんか」

「えへへへへ。お見せしましょうかね」

「いやですね。へんな笑いかたをして、もつたいをつけなくて見せてくださいよ」

「びつくりしてはいけませんよ。えへへへ」

「笑つてばかりしないで、早く見せてくださいな」

「このストックブックの中にあるのが、そうなんです」

「ギョギョッ。こりやまたずいぶんたくさんありますね。オ2次新昭和切手の五五塔50銭、オ3次新昭和切手の数字1円50銭、同じくオ3次新昭和切手の数字3円80銭、それに産業シリーズの5円と8円の採炭夫、同じく15円の紡織女工。みんな単片ですけれど、周回でこれだけ広く余白があるんですから、完全に目打なしですね。どれもこれも、数枚づつあるとは、いやあまつたく、すごいみたいですね」

「えへへへへ」

「おんや、紙質がすこし変ですね。これとこれは、ばかに白すぎるし、反対にこれは紙が悪すぎるみたいですよ」

「えへへへへ」

「紙はどのようなかな。ちよいとそのピンセットを拝借」

「あはははは。どうやうお気づきになつたようですね」

「先生、ひどいですな。この1円50銭と3円80銭は熊本展の小型シートをバラしたものですし、5円採炭夫は四国展、15円紡織

女工は長野展を切りとつたものではないですか。どうも紙が白すぎるし、未使用のくせに糊なしとはおかしいと思いました」

「あはははは。では、30銭の五五塔と8円の採炭夫はどうですか。これには小型シートはありませんッ」

「ええーッと、そうですね。この30銭の五五塔は日本郵便という字が左書きになつてますから、無目打時代のオ1次新昭和切手ではなく、オ2次新昭和切手のゲーハルのわけですし、8円の採炭夫は刷色がすこし赤つぽいみたいですが、へんだなア。両方とも紙質がうすいし、それにやっぱり未使用でありながら糊なしというのがどうも臭い」

「えへへへへ」

「あッ。わかりました。わかりました。切手付きの封筒ですね。あの印刷の部分の切りぬいたんですね」

「あはははは。ご明答です。使用済みですと糊のフアクターがなくなりまして、もつとおもしろいんですね。つぎのページに使用済みが並びますが、そちらを先にお見せすればよかつたのに」

「先生も人が悪いなア。ほととぎすの無目打シートを見せられたおかげに、こんなものを見せられると、ついギョッとして、小型シートがあつたことや、切手付き封筒が発行されたことを忘れてしまいますよ」

「いつぱいくわすには、こういうふうにしゃつしやんせ、というわけですよ」

「あははは。なるほど、ウソみたいな本当で信用させておいて、つぎには本当みたいなウソを言いと、手もなくコロリとひつかかつちやいますね」

「そうそう。それを悟れば、ペテン術の免許皆修で極意を授けてもよいというわけですよ」

「いやはやどうも、ひどい目にあつたなア。でも、日本切手でこの態の本物の目打なし誤作はほかにもあるんですか」

「ありますよ。特殊切手では2種類。万葉郵便適合75年の24円と、吉野熊野国立公園の小型シートの16円のみが目打もれになつたものが発見されています。また、通常切手ですと、オ1次昭和切手の30銭宮島の無目打が昭和20年10月に札幌市で1シート発見されましたし、オ2次新昭和切手の数字45銭切手の無目打が昭和23年6月に宮城県で、また同じオ2次新昭和切手の5円捕鯊が

同年11月徳島市で発見されています。あとの2種はたしかシートではなく、ある部分だけだつたよりに記憶しています。それに今回のほととぎす3円が昭和7年7月に長岡市で1シート発見ということになります。このほかに、目打の部分的欠除と申しますか、たとえばシート一番上の1段がないものなどは、かなりたくさん発見されています」

「先生はまたずいぶん詳しいですね」

「いや、切手文化会の日本郵便切手銘鑑にも記載されていますし、また日本郵趣協会の新日本切手カタログにも詳細に記載されているのを受け売りしただけです。全日本郵便切手商組合の日本郵便切手型録には書いてありま

せんがね」

「そうしますと、このほととぎすも、これらのカタログの1行に載るわけですね。だとすれば、やはり珍品の資格充分ありということになりますね。それにしても、さつきのあれには、マンマとくわされてしまいましたよ」
「小型シートや切手付き封筒のほか、コイン切手や切手帖、あるいは単線目打の切手を細工したものなどを無目打あるいは目打の部分的欠除と思いがちする場合がありますので、この種のエラーは、すくなくともペアでなければその真偽を判定しにくいということになります」

続・ほととぎす3円無目打誤作

本誌47号に、ほととぎす3円無目打誤作切手入手したテンマツを報告いたしましたところ、多くの集友諸氏よりおたよりをいただきました。

「どうも今度は、現品を神戸大会で参集者一同に見せたからには、電気冷蔵庫事件とは違って、本当らしいようだが、せめて写真ぐらいは掲載してほしいか」というお叱りも少なからずありました。

あの原稿とともに、写真を添付するというのも、まんざら考えないでもなかつたのであるが、写真術に年期を入れた人であれば、目打を消すことぐらいのインチキはお茶の子さいさいであるからには、写真を添えたところで真実性が増すわけでもないし、それに、第一経費の点が問題になる。44号のあの竜文4種肉筆複写をカシエとしたカバーの写真も、川仁さんがポケットマネーを出して、全額負担してくださつたから、あんな立派なものを入れることが可能になつたのである。

しかしながら、「現品を見たいのだが、長岡くんたりまで出かけて行けないので、せめて写真なりとも送つてほしい」と申される方も多いので、昔とつたキネツカ、複写くらいなんでもないとばかり手がけてみることに

にしたのだが、とんでもないことに相成ろうとはユメユメ思わなかつた。

複写用のカメラ、照明装置、現像、引伸しその他一切のもろもろの装置や道具類は、新潟大学工学部の精密機械科の光学研究室の設備を拝借することにした。こう大きになると、私の技術では、いと心細いので、この道のベテランである、同研究室の互助教授ジッキに技術指導をしていただくことにした。いや、それどころではない。ほとんどすべてにわたつて、直接手をくだしていただいたと正直に白状した方がよいであろう。従つて、私のしたことは、フィルムと印画紙、それに現像と定着用の薬品をうんとこさと買いそろえただけである。

かくして、二人で暗室に閉じこもることまさに三日間、ここに御高覧に供します写真ができあがつた次第である。10枚ブロックに換算して、約250枚ともなると、その引伸しの作業だけでも、いさかかならずウンザリする。かかる職人仕事みたいな作業まで、互助教授の手をわずらわすのも、まことにはやお気のどくでもあるので、大先生おんみずから手をくだしあそばされたものも少なからずある。

ところが、この大先生たるや、御承知のとおり、若年よりの強度の近視とコンタクトレンズでないかぎり補正できぬやつかいな強度の乱視。おまけにここ数年とみに老眼が進行したとあつては、赤いセーフティランプのもとでは、ピントがあつているのやら、はたまたボケているのやら、ましていわんや強寸大に引伸ばされているのやら、非常すこぶるさだかでない。おまけに、再三再四写真材料屋から印画紙を取りよせるほどのマスプロ作業となつたので、しまいにはなんのインガでこんなことをやらねばならぬのか、うらめしい

のはこのほととぎす、てなことになつてしまつた。

最後のフェロタイプ仕上げには手を焼いてしまい、印画紙を届けに来たカメラ商の女店員にインガを含めて、その店でやつてもらふことにした。濡れた印画紙の山を見て、こんなにたくさん何にするんですかと、うらめしそうに持つて帰る女店員の後姿のありがたかつたこと。同封の写真がもしピンボケだったり、断裁が曲つていたら、これぞすなわち会長閣下の御作品とおぼしめせ。

